

第 27 回九州山口ハイパーサーミア学会

集学的治療で長期生存が得られた胃癌術後多臓器転移の一例

社会医療法人共愛会 戸畑共立病院 臨床工学科 垣下ひかる

共同演者

臨床工学科 川崎玲、樋口優子、大田真

放射線科 森岡文明、鞆田義士、成定宏之、今田肇

症例は 70 代男性。2006 年 6 月に他院にて胃がん StageIV と診断。2008 年から 2009 年にかけて、右副腎と右大腿骨転移が判明し治療開始。右副腎に対し手術、右大腿骨に対しては放射線治療施行。2010 年 8 月に右大腿骨腫瘍の再燃に対し放射線治療、疼痛緩和目的で温熱治療を開始。2013 年 4 月、左肩甲骨と後腹膜に腫瘍が確認。放射線治療開始と同時に後腹膜に対し温熱化学治療を開始。2014 年 1 月、肺と肝臓に転移し、他院にて TS-1 内服。その後、骨転移の再燃、転移性脳腫瘍が確認された為、放射線治療とサイバーナイフを開始。温熱治療の詳細は、2011 年 7 月から 2013 年 10 月まで右大腿骨に対し、平均出力 480W、50 分で計 60 回。後腹膜に対し、2013 年 5 月から 12 月まで、平均出力 512W、50 分で計 8 回施行。

本症例は緩やかに進行する腫瘍であり、集学的治療を施行し有害事象を起こさずに経過できたことが長期生存へ寄与したと考えられる。温熱治療に関しては右大腿部へ長期に渡り施行したが、病状の進行抑制に貢献したと共に、歩行維持という QOL への貢献も大きかったと考えられた。